

授業実践例紹介①

3年選択「被服製作」での授業実践

～高齢者のためのファッションショーの取り組みを通して～

京都府立桃山高等学校教諭 三村 朋子

1. はじめに

京都府立桃山高等学校は、京都市伏見区桃山にある創立90余年の伝統校である。普通科と自然科学科を有し、一学年9クラス、全校生徒約1,100人の大規模校である。生徒の約9割は大学・短大に進学する。クラブ活動も盛んで、生徒の8割が所属している。家庭科科目は、1年次で「家庭基礎」2単位を全員履修する。選択科目は、普通科の標準的な類型である第I類一般系の2年次で「発達と保育」、3年次で「フードデザイン」と「被服製作」が置かれている。『高齢者のためのファッションショー』は、3年選択科目の「被服製作」での取り組みである。

2. 事の起こり

『高齢者のためのファッションショー』に取り組んで、今年で12年になる。事の起こりは、本校家庭科が、平成12・13年度に文部省（当時）の研究指定を受けたことであった。

予想以上の速さで少子化と高齢化が進行している。平成11年12月に少子化対策推進閣僚会議で決定された新エンゼルプランには、「高校生保育・介護体験総合推進事業を教育委員会に研究委託し、その成果を普及することにより、すべての高等学校において保育・介護体験を推進」と明記されている。

この研究指定を受けるにあたっては、さまざまな検討が必要であった。本校は保育体験実習については当時すでに全員実習を実施しており、次に介護体験実習に取り組んでみたいと思っていたところであった。家庭科の学習は、座学や視聴覚教材よりはるかに直接体験の方が効果がある。ところが本校は一学年9クラスもある。保育園実習でも大人数の受け入れは難しいのに、ましてや高齢者施設での実習となると、さらに困難である。だからといって9クラスのうちの数クラスだけ実習するのは不公平であ

る。そうすると、選択講座で実施するほかない。当時の本校の選択講座は「保育」「食物」「被服」であり、福祉系の選択科目はなかった。「保育」と「食物」で高齢者介護体験をするのは無理がある。すると残るは「被服」となる。しかし、科目の目標に外れることなく、「被服」という科目で高齢者介護体験するにはどうしたらよieldろうか。研究指定を受けたために「被服」の中身をがらりと変えてしまうことはできない。研究指定を受けると決まったのは3月で、生徒はそうとは知らずに選択している。

そこで、「そうだ、高齢者の服を作ればいいんだ」と思いついた。高齢者の服を作るためには、高齢者の体型や好みを知る必要がある。服を作るために実際に高齢者に会いに行くのだ。高齢者の体の状態を見て、着脱しやすい服を作ることを目的にすれば、「被服」本来の学習目標が達成できる。そして生徒は高齢者と交流することによって、高齢者理解を深めることができる。そう考えてこの取り組みを始めたのである。

3. 高齢者介護体験実習の取り組み

研究指定では、高齢者介護体験を取り入れなければならぬ。そのため、研究課題を「高齢者との交流や介護を通して、高齢者や体の不自由な人に着やすく快適で、介護する人にも着せやすい衣服について考える」とした。

平成12年度は、受け入れ先の開拓から交流方法まで、すべてが手探り状態であった。「介護体験」という言葉に縛られて、介護に関する講演を聞いたり、介護機器を見に行ったり、デイサービスセンターや特別養護老人ホームを訪問したりした。しかし、生徒の反応はもうひとつであった。

うまくいかない原因はいろいろあった。その年度の生徒はこの取り組みを知らずに選択したので、高齢者の服ではなく、自分の着る服を縫えると思って

いた。また高齢者や福祉関係に進学・就職を考えている生徒はいなかった。そんな生徒たちに、「高齢者との交流を通して高齢者の服を考え製作する」という授業は、特別な配慮を要した。高齢者福祉施設に行っても、「行かされている」と感じる生徒もいて、自分から積極的に話しかけたりせず、決して良い交流ができたとは言えない場面もあった。

そこで平成13年度の生徒には、科目選択時に授業内容をよく説明して選択させ、高齢者福祉施設に実習に行く前には、高齢者理解のための事前学習の授業を増やした。また手ぶらで行って話しかけるだけでは間が持たず、会話が續かない生徒もいるので、高齢者と一緒に作業（折り紙、ゲームなど）して楽しめるようにした。

そして、これが一番大事なことなのだが、「高齢者イコール介護が必要」と思わせないようにした。私自身が「介護体験」という言葉に縛られすぎていたのだ。

保育園実習には行きたがるが、高齢者施設には行きたくない生徒は多い。核家族で暮らしていて高齢者と身近に接していないし、別居している祖父母もまだ元気で介護が必要ではない。そのような生徒たちに、いきなり介護が必要な高齢者と交流させると、「高齢者イコール介護が必要」とか「年はとりたくないものだ」という印象を与えかねない。

そこで、特別養護老人ホームの高齢者だけでなく、心身ともに元気な高齢者、身体は少し弱ったけど気持ちちは元気な高齢者など、いろいろな高齢者と交流させるべきだと思った。生徒が自然に高齢者に敬愛の念といたわりの気持ちを抱くような関わりを持たせたい。その点で、京都市伏見老人福祉センターの協力が得られたことは有難かった。ここは、65歳以上のさまざまな健康状態の高齢者が集ってこられる場所であった。

4. ファッションショーの起こり

そもそもファッションショーを目的として始めたのではなく、高齢者と交流することが目的であった。「被服」という科目で高齢者と交流するために、服を介しただけである。研究指定1年目の平成12年度は、寝たきりの人や車いすの人に着せやすい服など、介護服や病衣を考えさせた。それは決して高齢者だけに必要とされるものではなく、若くてもけがや病気で不自由な生活を強いられた時には役に立つ服で

ある。当時、そのような服はまだ商品化されていなかった。

生徒たちは一から服を作る時間の余裕がないため、介護服や病衣を作っておられる方から借りてきて説明することになった。生徒は、研究発表会的に高齢者の前で自分たちが説明するものと思っていた。ところが、老人福祉センターの職員の方が、「モデルは高校生ではなく、高齢者にさせていただけませんか？ 高校生の取り組みを、ただ見るだけより参加型のほうが高齢者は喜ばれると思います」と言われた。

目から鱗であった。「介護体験」という言葉に縛られていた私は、高校生が高齢者に「してあげなければならない」と思い込んでいた。「見ていただいて、喜んでいただかなければならない」と思っていた。元京都府立医科大学附属病院総看護部長の中嶋芙美江先生からも指摘されたことであるが、介護とは何もかもお世話することではなく、高齢者のできることはできるだけ自分でしていただき、できないことだけを援助する、それが正しい高齢者との接し方であると気づかされたのである。

そこで急遽、生徒にその旨を話し、高齢者にモデルになっていただくことに決めた。第1回のファッションショーは、デイサービスセンターの利用者にモデルになっていただき開催した。ショーを見た職員の方が「いつも下を向いて無表情の〇〇さんが、今日は今まで見たこともないような明るい笑顔でモデル歩きしておられ、びっくりしました」と感想を述べられ、別の職員の方も「こういう機会はいいいですね。たくさんの人に注目してもらえて、高齢者モデルの皆さん、とてもいい表情をしておられました。ぜひまた開催してください」と言って下さった。



このようにして、高校生が高齢者の着やすい服について考え製作し、それを高齢者がモデルとなって

披露するという形ができたのである。

5. 研究指定2年の後に

研究指定は平成12・13年度の2年間で終了した。しかし、高齢者モデルによるファッションショーは好評で、その後も社会福祉協議会や伏見区女性会から依頼があり実施している。高齢者はもとより、高校生がファッションショーの後、とても良い表情になる。そして感想文には、「来年もぜひ後輩のために続けて下さい」と口をそろえたように書いてくれた。そこで、ファッションショーは継続して実施することにした。

6. ファッションショー12年の変遷

その後「被服」の授業では、3学期に「高齢者のためのファッションショー」を実施するという形が定着した。しかし12年の間にはいろいろな変遷があった。

(1) 単位数の変化

平成13年までは4単位であったが、平成14年から2単位に減った。その後、総合的な学習の時間1単位を組み入れ、今日まで3単位で実施している。

(2) ショーのテーマの変化

介護体験の研究指定を受けた2年間は、介護服や病衣が中心で、それをいかに工夫して着脱しやすく、過ごしやすくするかがテーマであった。しかしその後は、いわゆるユニバーサルデザイン（身体の不自由な人も元気な人も誰でも着やすいもの）が中心になった。特別養護老人ホームに実習に行かなくなったということに加え、モデルをしてくださる高齢者の、年をとっても身体が不自由になってもおしゃれ心を持ち続けたい、明るい気分でいたいという要望にこたえてのものであった。また高齢者の「もったいない」精神に沿って、古着からリフォームした作品を作ったり、平成22年度は京都府の「古典の日推進に向けた次世代育成事業」の指定を受けて、日本の伝統衣装である「きもの」をリメイクして作品を作った。

(3) 生徒の進路の変化

かつては「被服」を第一希望で選択した生徒がほとんどであった。そして就職や専門学校・短大希望の生徒が多く、ファッションショーの取り組みの1月にはほぼ全員の進路が決まっていた、ショーの直前には放課後みんなで残って作品を仕上げるこ

ができた。ところが近年は、第一希望が定員オーバーしたため、やむを得ず「被服」にまわってくる生徒が増えてきた。また4年制大学を希望し、一般入試まで勝負するため、放課後までは残れないという生徒も出てきた。

(4) 生徒の技能の変化

縫物が苦手な生徒や不器用な生徒は昔からいた。かく言う私自身も器用ではない。しかし今の生徒はそれ以前である。だから授業でなみ縫いから教える。玉結びも一からやる。物差しの目盛りが読めない。「目分量」とか「だいたい3センチ」とかいうのがわからない。布に縦・横や表・裏があることを知らない。「縫い代」の概念のない生徒もいる。布をハサミで切ったら、布端の始末をしないとイケないこともわからない。

そんな生徒たちに高齢者のための服を作らせているのだから、きちんとしたものは作れない。「高齢者にプレゼントするから」と言っても、アームカバーや巾着など簡単なものから作らせる。とある生徒の縫製のあまりのずさんさに、呆れるよりも愕然としたことがあった。しかし、すぐ気を取り直した。この生徒は手抜きをしたのではない。正しい縫い方をせずに我流で作っただけであろう。生徒たちは洋裁の道に進もうとしているのではない。最低限、身の回りのものだけ縫えればよい。それより一人ひとりの適性を見て、それを伸ばす手伝いをしよう。縫うのは下手だが美的センスの良い生徒もいる。適当だけど段取りの良い生徒もいる。手は遅いけれど丁寧できれいな仕事をする生徒もいる。グループで作業させて互いの良さを活かすよう工夫している。

7. 高齢者のためのファッションショーの成果

この取り組みを通して、生徒たちには次のような教育的効果が得られた。



- ① いろいろな健康状態の高齢者と交流することができ、加齢に伴う身体機能の低下を実感し、高齢者や体の不自由な人への理解を深めることができた。
- ② 自身が高齢であっても、元気で他の高齢者のお世話をする方の姿を見て、すべての人が介護が必要になるわけではなく、自分も将来元気な高齢者でいたいと思うようになった。
- ③ 人生の先輩の話聞き、戦争や貧困や大きな災難を乗り越えた話から、励まされたり教えられたりした。
- ④ 家族関係を見直すきっかけとなった。同居の祖父母や離れて暮らす祖父母に対しても、もっと関わろうという気持ちになったり、介護している家族の苦勞を察するようになった。
- ⑤ 高齢者や体の不自由な人の衣服について考え、加齢による体型の変化や、身体機能・生理機能の低下に対応して、それらを補い、快適に過ごす衣服の工夫を知り、高齢者に提案することができた。
- ⑥ 斬新な、大人が思いもつかないような発想の作品は、意外にも高齢者に大変好評である。褒めてもらったことで生徒は高齢者に好感を持ち、相互に良い交流ができた。
- ⑦ 交流の中で地域とのつながりを感じることができた。卒業生が地域にたくさんおられて好意的に受け入れていただいて、地域に愛される桃山高校の生徒であることに誇りを感じた。

8. 今後の課題

ショーを継続するにあたっての課題はいくつかある。

(1) 取り組みに要する時間

3単位の選択科目「被服製作」の授業での取り組みなので、放課後や休日は拘束できず、全員が集まるのは週3時間の授業だけである。その中で準備をしなければならない。居残りできない生徒は、自宅で個人で製作してやることになる。

(2) 作品の製作費用

研究指定を受けた年は、いくらかの予算がつくのでショーに必要な費用をまかなうことができたが、それ以外の年は、PTA会費から援助していただいたりしている。お金をできるだけ使わずにできる作品作りを心掛けてきた。布から服を作るのは時間的にも生徒の能力的にも難しいこともあって、古着をリフォームしたり、きものをリメイクしたり、お金をかけず、また簡単に作れるものを作ってきた。

有難いことに、地域の方や高齢者モデルさんから、「高校生の作品作りに役立ててください」と、古布・古着・きもの・帯・反物などを提供していただいている。それでほとんどまかなうことができ、助かっている。できるだけお金を使わず、あるもので作るということは、「もったいない」精神にもものっている。

(3) ショーの開催時期

	授業時数	平成23年度の授業内容
1 学期	28	基礎縫い・ゆかたの製作
	2	校外学習「猿之助歌舞伎の魅力展」(京都南座)
	2	着物の柄をデザインする(全国きものデザインコンクールに応募)
2 学期	2	きもの着付教室(服部和子きもの学院長 服部和子先生)
	4	手作りゆかたショー(京都府SKYフェスティバルにて)準備含む
	8	高齢者理解のための学習
	2	体験学習「植物(刈安)でスカーフを染める」(染司 吉岡幸雄先生)
	7	高齢者モデルとの交流会(京都市伏見老人福祉センターにて)準備含む
	12	ファッションショーの作品製作
3 学期	4	ファッションショーの作品製作
	2	高齢者のためのファッションショー(京都市伏見老人福祉センターにて)
	1	反省会

1学期はゆかたの製作にあてる。生徒は、祇園祭に間に合うようにがんばって縫う。2学期から高齢者の取り組みを実施する。指定校推薦入試や公募推薦入試で、受験する生徒は12月中に進路が決定するので、1月のほうが動きやすい。このため、今までずっと1月実施であった。しかし高齢者にとっては、寒い時期で体調を崩しかねず、センター試験や一般入試を控える生徒には負担となる。今はグループで分担作業して、受験を控えている生徒には配慮してあげるように言っている。放課後は、進路の決まった生徒だけで取り組むことになる。

9. あとがき

「今年こそ、これで最後にしよう」と何度も思った。ショーまであと2週間しかないのに、まだ作品がほとんどできていない。放課後も生徒が数人しか集まらない。生徒の気分が盛り上がっていない。教師のやる気だけが空回りしているだけの取り組みなら止めたほうがいい。生徒が作りたいものを作らせ

たほうが教育効果が上がる。

それなのに、また次の年もやっている。なぜだろうか？ 高齢者がショーを楽しみに待っていただいているというのも一因だが、生徒はショーの前日にはこちらが期待した以上の作品を作り上げてくれるのだ。そしてショーを終えると生徒が変わるのである。やる気の無かった生徒、いい加減に作品を作った生徒が、ショーの当日はものすごく気を利かせて動いている。目の輝きがいつもと違う。高齢者としてもよい交流をしている。そして「お年寄りに喜んでもらえて嬉しかったわ。来年もショーは続けてやってな。後輩たちのために」と言ってくれる。だからまた次の年もやろうと思う。

この取り組みを続けることができるのは、京都市伏見老人福祉センターの職員の方々の御協力と、モデルを快く引き受け、高校生に慈しみの心を醸し出させてくださる高齢者のおかげです。この場をおかりして感謝申し上げます。

実教出版発行の家庭科教科書

25年度発行予定 新課程用教科書

★図説家庭基礎

★家庭基礎

パートナーシップでつくる未来

★家庭基礎21

★家庭総合

パートナーシップでつくる未来

★フードデザイン

【現行課程用】

文部科学省検定済教科書

043 新家庭基礎

未来へつなぐパートナーシップ

044 新家庭基礎21

012 家庭基礎

自分らしい生き方とパートナーシップ

034 新家庭総合

未来をひらく生き方とパートナーシップ

035 新家庭総合21

003 家庭総合

自分らしい生き方とパートナーシップ

025 家庭情報処理

027 被服製作

050 発達と保育 新訂版

051 フードデザイン 新訂版

文部科学省著作教科書

023 生活産業基礎

024 ファッションデザイン

030 服飾文化